

# かどへのおおきみ 門部王「飫宇の海」歌の景観論的考察

神 英雄

はじめに

一、二人の門部王

二、『出雲国風土記』に見える意宇平野

(1) 飫宇おうの海の河原

(2) 中海

(3) 山陰道

(4) 国守館

三、門部王の二首への接近

(1) 卷3―三七一について

(2) 卷4―五三六について

むすび

はじめに

『万葉集』に収められている歌の中、山陰地方に関係する歌は約五〇首ほどあるといわれる。筆者は、歌に詠まれた世界を正しく理解するためには、当時の景観を出来るだけ正確に捉えた上で、作品の文学性に迫ることが大切だと考え、これまで石見の万葉歌について景観論の

立場から論じてきた。<sup>(1)</sup> そのような景観論的研究の延長として、やがて出雲の万葉歌と景観の關係に興味を持つようになった。

歌・題詞・左註から出雲に關係するとされる歌が五首ある(卷3―三七一・卷4―五三六・卷7―二三三・卷20―四四七二・同四四七三)。そして、卷3と卷4には、出雲守門部王が詠んだ次の二首の歌が載る。

出雲守門部王、京を思ふ歌一首 後に、大原真人の氏を賜ふ

① 飫宇おうの海の河原の千鳥汝が鳴けばわが佐保河の思ほゆらくに (卷3―三七一)

門部王の恋の歌一首

② 飫宇の海の潮干の瀉かたもいの片思に思ひや行かむ道の長手を (卷4―五三六)

右は、門部王、出雲守に任さず時、部内の娘子を娶めとる。いまだ幾時ならずして、既に往来を絶つ。月を累かさねて後、また愛しぶる心を起す。よりにてこの歌を作りて娘子に贈り致す。<sup>(2)</sup>

この歌が詠まれた当時の出雲の景観と現在のものはだいぶ異なるが、文学的価値を追求する研究では、現景観に基づいた不確かな推測による注釈や考察が多く見られた。また、歌の中に出てくる地名につ

いて、充分な検討を経ぬまま場所が特定されることもあった。<sup>③</sup>この方法だと、正確な景観が判明した時、歌の組成が瓦解して、描かれた情景が変わってしまう危険性がある。

幸いにして、出雲には当時の景観を詳細に描写した『出雲国風土記』がある。さらに、出雲国府周辺の総合調査が進み、当時の河川・湖の汀線・植生・駅路・国庁周辺の官衙や居宅、耕地などの空間構成がかなり判ってきている。それらの研究成果を踏まえて、国庁周辺の景観上の特徴を把握した上で歌を分析すれば、出雲の古代景観が門部王の作品の中でどのように表現されたかが理解出来るだろう。以下において、国文学の佐佐木忠慧の歌枕研究の手法に導かれながら、出雲国守門部王の二首に迫りたい。

## 一、二人の門部王

『万葉集』には、門部王の名が表記された歌が五首収められている(巻3―3110、巻3―326、巻3―371、巻4―536、巻6―1013)。しかし、これらは一人で詠んだものではない。八世紀前半のほぼ同じ時代に門部王という同名の人物が二人存在し、二人の詠んだ歌が混在していることを佐野正己<sup>④</sup>や黛弘道<sup>⑤</sup>らが明らかにしている。

一人は、和銅六(七一三)年に従四位下に叙せられ、刑部大判事や造頓宮司を経て彈正尹となり、天平九年頃に亡くなった門部王である。彼は巻3―326、巻6―1013を詠んだ。

今一人の門部王は、『新撰姓氏録』に敏達天皇の孫百濟王の後裔と記

され、応永三三(一四二六)年に成立した『本朝皇胤紹運録』<sup>⑥</sup>という天皇の系図には、天武天皇の皇子長親王(長皇子)の孫で川内王の子とある。

彼は和銅三(七一〇)年正月に従五位下に叙せられ、靈龜三(七一七)年正月に従五位上となった。養老三(七一九)年七月の伊勢守在任中に按察使を兼任し、伊賀・伊勢の二国を管した。二年後に正五位下となり、さらに神龜元(七二四)年に正五位上となり、続いて同五年五月に従四位下に昇進した。

彼の歌に

東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみうべ恋ひにけり

(巻3―3110)

〈大意〉 東の市の植木の枝が垂れ下がるまで久しく逢わなかったので、こんなに恋しく思うのももつともだ。

というものがあるが、佐野は、伊勢守の任を終えて都に戻った時の歌だろうと推理する。首肯出来る見解である。

その後、彼は出雲守となった。『統紀』に門部王の出雲守就任の記事は見られない。しかし、養老三(七二四)年、伊勢守在任時に按察使を兼務したことが載り、この年、息長真人臣足が出雲守として赴任したことを勸案すれば、出雲に出かけたのはそれ以降のことと考えられる。一方、天平六(七三四)年二月には平城京にいたことも判っている。それらから、門部王の出雲守在任期間は、養老四年頃から天平六年頃までの間のいずれかの時期ということになるだろう。

さらに、澤瀉と佐野は、①・②の載る巻3・巻4の歌がほぼ年代順に歌が並んでいることに注目し、前後の歌の年代関係から、養老四年から神龜年間にかけて赴任していた(澤瀉)、あるいは神龜元年に出雲守に任じられた(佐野)とした。

これに対して、黛弘道は、藤原仲麻呂の専横政治が行われた期間は、一例を除いていずれも三位か四位の者が守として赴任したが、それ以外は概ね五位の者が出雲国守に補任されたことを明らかにし、門部王の在任期間を息長臣足と石川年足の二人の国守の間に求め、養老五(七二一)年に正五位下に叙せられた前後数年ではなかったかと考えた。<sup>⑩</sup>「上国」である出雲国守の官位相当階は従五位下であるが、黛の指摘するように、仲麻呂時代を除くと、出雲守の位階は従五位下から正五位下であった。それゆえ、養老五(七二一)年前後とする黛の考察は正しいだろう。この時期に詠まれたのが冒頭の二首(①・②)である。

門部王は、神龜年間(七二四〜七二九)には六人部王・長田王・狹井王・桜井王・石川朝臣君子・阿倍朝臣安麻呂・置始王ら十余人とともに「風流侍従」と称せられた。<sup>⑪</sup>

天平六(七三四)年二月平城宮の朱雀門前広場において天覽の歌垣が催された。この歌垣には男女二四〇余人が参加し、門部王は五位以上の風流ある者の頭の一人を勤めた。同九年には右京大夫となり、同十一年四月、高安王とともに大原真人の氏姓を賜った。彼は同十七年四月二十三日に卒した。時に従四位上太蔵卿であった(門部王略年譜参照)。

門部王が出雲に赴任していたと推定される養老五年頃、神宅臣全太理や出雲臣廣嶋らによって『出雲国風土記』(天平五(七三三)年完成)

### 門部王略年譜

和銅3 (七一〇) 年正月	従五位下に叙せられる。
靈龜3 (七一七) 年正月	従五位上となる。
養老3 (七一九) 年7月	伊勢守在任中に按察使となり、伊賀・伊勢の二国を管する。都に戻った後、東市の歌(3―310)を詠む。
養老5 (七二一) 年	正五位下となる。
養老5 (七二一) 年頃	出雲守となる。巻3―371、巻4―536の2首を詠む。
神龜元 (七二四) 年	正五位上となる。
神龜5 (七二八) 年5月	従四位下となる。
神龜年間 (七二四〜七二九)	六人部王・長田王・狹井王・石川朝臣君子・阿倍朝臣安麻呂・置始王ら十余人とともに「風流侍従」と称せられる。
天平6 (七三四) 年2月	朱雀門前広場の歌垣において五位以上の風流ある者の頭となる。
天平9 (七三七) 年	右京大夫となる。
天平11 (七三九) 年4月	高安王とともに大原真人の氏姓を賜る。
天平17 (七四五) 年4月23日	卒(従四位上大蔵卿)。

の編纂事業が行われていた。『風土記』に描かれた景観は、門部王が目の当たりにしたものに他ならない。それゆえ、『出雲国風土記』の記述を手がかりにして国庁や国守館があった意宇平野の景観を明らかにすれば、門部王が実際に見た景観が見えてくる。そのようにして判明した景観をもとに、門部王の詠んだ二首を分析すれば、その文学性に迫ることが出来るだろう。

## 二、『出雲国風土記』に見える意宇平野

### (1) 飫宇の海の河原

中国山地の天狗山(熊野山)付近から流れ出した意宇川は、松江市八雲町を北流し、大草町付近で北東に向きをかえ、意宇町付近で中海に注ぐ。全長約十一・五キロに及ぶ川の上流には熊野神社があり、下流には意宇川の堆積物によって形成された意宇平野(南北約一・三キロ、東西約三キロ)が広がる。<sup>12)</sup>

平野の北部には意宇郡の神名樋山(野)に比定されている茶白山(一七・五メートル)があり(図1)、茶白山の北東には国分寺(図2)・国分尼寺がある。そして、平野南部には出雲国府関連の官衙や居館、工房などの施設や意宇郡関連施設が計画的に配置されていた。

意宇川の「意宇」は、現在「イウ」と読むが、古代には「オウ」と読まれていた。『出雲国風土記』には、「意宇川、源は郡家の正南一十里なる熊野山より出で、北に流れ東に折れ流れて入海に入る。年魚伊具比あり」と記されている。門部王が記す「飫宇の海の河原」とは、

中海に注ぐ意宇川の河原を指すものと思われる。

意宇平野では、現河道のほか、二つの旧流路が確認できる。このうち、北寄りの流路が最も古く、平野中央の流路痕は古墳時代前・中期のものとして推測される。<sup>13)</sup> 出雲国府がつけられた時期には、ほぼ現在と同じような流路をとっていたと考えられるが、八世紀段階では、平野中央部の一部に旧流路が低湿地として残存していたようである。

古代の意宇川は、国道九号線が通っている砂堆に妨げられて西側に大きく湾曲し、砂堆の内側に沿うように北に向かい、さらに竹矢町付近で東向きをかえて中海に注いでいた。現在の河道は、後世、人為的に砂堆を開削して意宇川の直線化工事が行われた結果出来たと見られる。<sup>14)</sup> また、成瀬によれば、中海沿岸の《三角州Ⅱ面》は中世に形成されたのではないかという。これが正しいとすると、古代における意宇川の河口は、現在のJR東松江駅近くの《浜分》付近にあったと推定される。そして、意宇川河口付近では、中海の汀線(海岸線)が砂堆に沿って大きく彎入していたようである。

### (2) 中海

門部王が「飫宇の海」と表現したのは、『出雲国風土記』では「入海」と記されていた中海を指す。現在の中海は、弓ヶ浜半島によって日本海と分断され、わずかに境水道で繋がっているだけだが、同書には、弓ヶ浜半島は「夜見の嶋」と記されている。「入海」にはイルカ・ワニ・ボラ・スズキ・コノシロ・チヌ・シラウオ・ナマコ・エビ・ミルなど海水域に住む魚介類が生息しており、海であったことが判る。<sup>15)</sup>

高安克己・竹広文明は、中海の湖底から採取したコア試料や地質学

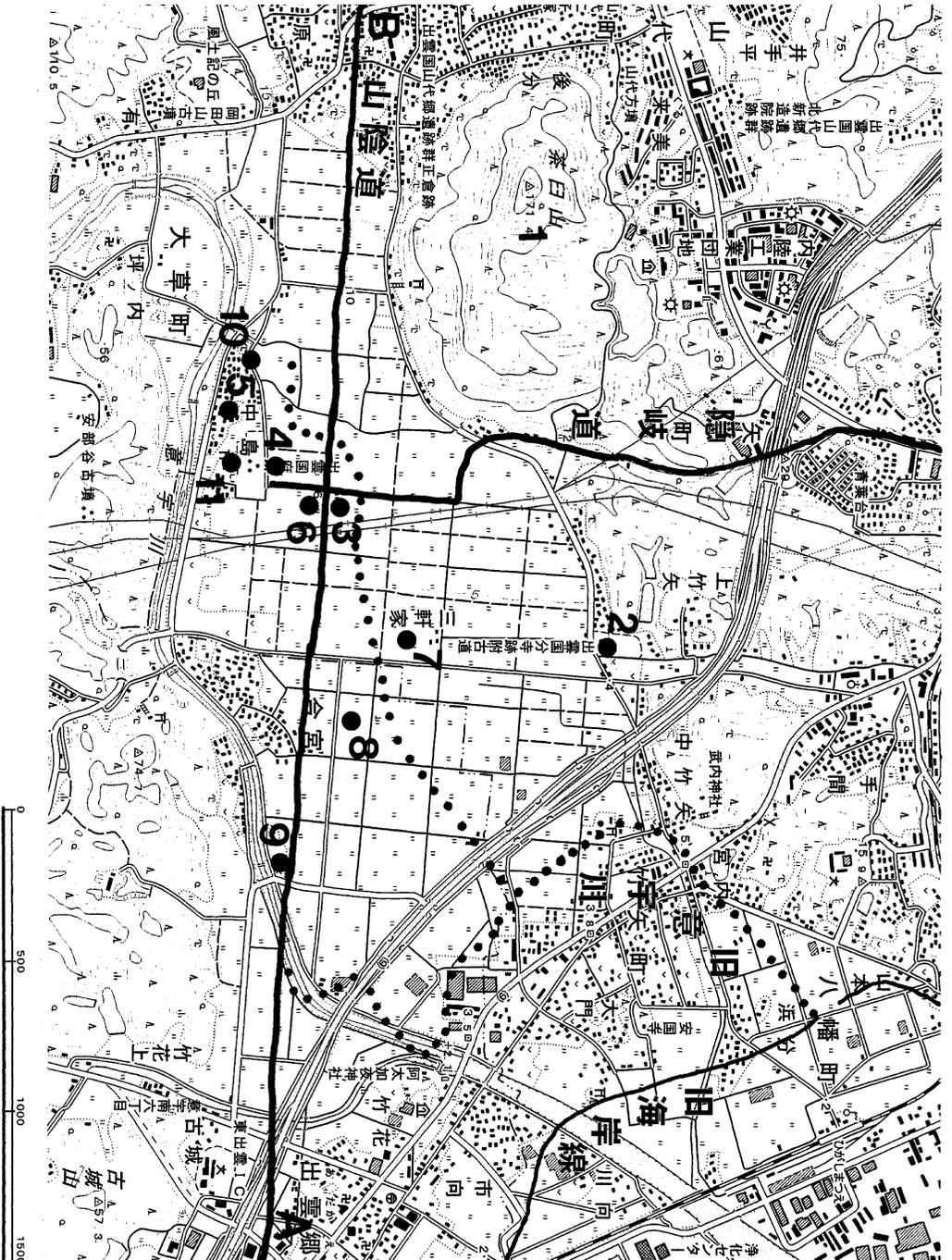


図 門部王在任時期の意字平野

1. 神名樋山(野)
2. 国分寺
3. 推定黒田駅
4. 介館
5. 推定国守館
6. 推定意字郡家
7. 推定出雲臣居名(廣嶋系)
8. 推定意字の杜
9. 伝阿大加夜神社旧社地
10. 推定国塚館
11. 国庁

本図は、国土地理院発行1/25,000「松江」である。各遺跡の位置は、島根県古代文化センター『出雲国府周辺の復元研究』に拠った。

データを分析をして、『出雲国風土記』に記載された地形や植生を推定した。それによれば、弓ヶ浜半島を形成する砂州のうち、約三分の一以上を占める「外浜」といわれる日本海に面した地域は、近世以降に形成されたものであり、弓ヶ浜半島の頸部付近は近世初頭までしばしば日本海と繋がっていたと推定される<sup>(20)</sup>という。

また、中海の中央付近の湖底のボーリング調査の結果からは、「弥生時代の小海退期の後、海面は上昇傾向に転じ、中海の塩分も上昇してきた。一五〇〇年前頃になると閉鎖的水域は現在の中海と同様に貧酸素水塊を形成するようになった。しかし一四〇〇年前頃に再び弓ヶ浜の一部が沈水し、「夜見の嶋」が出現した。これによって中海に海水が容易に流入するようになり、環境は一変した。塩分は湖心部でも現在の境水道から美保湾程度であった<sup>(21)</sup>。このようなことから、『出雲国風土記』の記載が正確なものだと判る。

### (3) 山陰道

圃場整備事業前の意宇平野には約一〇九m毎の方格地割が展開していた。古代の条里プランの痕跡である。その中に、幅約十四mの条里余剩帯が断続的に見られた。これが山陰道の痕跡である。平野部を通る古代山陰道は直線的に敷設された計画道路であり、意宇平野の地域計画の基準となった(図A—B)。平野の大半に見られる一町毎の方格地割(条里プラン)も、駅路を基準に施工されたと思われる。また、東出雲町出雲郷付近の非条里地域でも、東西に直線的に伸びる道路痕跡が連続して見られる<sup>(22)</sup>。

このことから、中村太一は、かつて中林保が推定した「山代町・竹

矢町・大草町の各大字境界が、逆十字形に交わる地点を「国庁十字街」とし、この地点から、東に伸びる竹矢町・大草町の境界線を正東道に、北に伸びる山代町(途中からは矢田町)・竹矢町の境界線を隠岐道(枉北道)に、西に伸びる山代町・大草町の境界線を正西道に比定する、考え方を踏襲したい<sup>(23)</sup>とした上で、意宇平野のほぼ中央を東西に通る山陰道駅路を想定した。こうして推定された古代山陰道は、意宇郡内では、松江市乃木福富町の松本遺跡から掛屋町中意東まで約十二キロにわたりほぼ一直線に延びるものであった。この推定経路については、島根県古代文化センターが考古学的立場から検証し、概ね妥当なものであると結論している<sup>(24)</sup>。

この区間の山陰道は、松本遺跡の位置する丘陵から東側の平野を見通して測量した可能性がある<sup>(25)</sup>。その場合、真東に十神山(『出雲国風土記』には砥神嶋とある)山頂が見え、あたかも十神山を見通して計画的に敷設したように思われる。

『延喜式』には、出雲の駅として、野城・黒田・宍道・狭結・多伎・千酌の六駅が記されている。このうちの黒田駅について、『出雲国風土記』は、「黒田の駅、郡家と同じき処なり。郡家の西北のかた二里に黒田の村あり。土の体、色黒し。故、黒田といふ。旧、此処に是の駅あり。即ち号けて黒田の駅といひき。今は郡家の東に属けり。今も猶、旧の黒田の号を追へるのみ<sup>(26)</sup>」と記し、場所が移動したことが判る。門部王在任中は、国府北方の十字街に接する場所にあったと考えられている(図3)。

#### (4) 国守館

国府には、守・介・掾・目の四等官を始め諸官人の住む館があった。出雲国府では、後方官衙群の北側の大舎原地区において、柱間3mで南北五間×東西二間の二棟の大型建物が発見され、周辺から「館」・「介」・「厨」などと記された墨書土器が検出され、介館であると考えられている(図4)<sup>27</sup>。

門部王が住んでいた守館の位置は発掘調査で確認されていないが、歴史地理学の研究では、恐らく国庁に隣接する場所にあったと推測されている(図5)。山陰道と枉北道きたにまがれみち(隱岐道)の交差する国庁十字街付近には黒田駅に隣接して意字郡の郡家(図6)も置かれ、国造で意字郡司だった出雲臣広嶋の居館は、十字街の北東に推定されている(図7)。

### 三、門部王の二首への接近

前節までに判明した意字平野の古代景観をもとに、門部王の二首に迫りたい。

#### (1) 卷3—三七—三七一のついで

門部王は、卷3—三七—三七一において、

飢字の海の河原の千鳥汝が鳴けばわが佐保河の思ほゆらくに

《大意》 飢字の海に注ぐ河の河原に鳴く千鳥よ。お前が鳴けば私の故郷の佐保河が思われることである。

と詠んだ。これは、多くの先学が指摘しているように、『万葉集』巻3—二六六の柿本人麻呂の歌

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情こころもしのに古思ほゆ

《大意》 近江の海の夕波に飛ぶ千鳥よ、お前が鳴くと心もうちなびいて、しみじみと昔のことが思われることだ。

を援用したものである。人麻呂の歌には、栄華を誇った旧都(大津京)が廢都後急速に荒廢していくことへの悲哀が込められているが、それは人麻呂の自然な感情の発露であった。

柿本人麻呂はしばしば旧作の一部を引用したが、それに接した宮廷人は、脳裡に旧作の世界や思い出の中の景観を思い起こし、より一層大きな感動を得たに違いない。しかしながら、たんに人麻呂の作品を援用しただけでは、決して読者の共感を呼ぶことはないだろう。しかも、門部王はなぜ人麻呂の歌を援用したのだろうか。

この歌の背景には、井上實が考察したように、都から派遣された国司と国造を頂点とする出雲の在地勢力(郡司)の対立があったことは間違いない<sup>28</sup>。一般に風土記選定において、中心となったのは国司であったと考えられる。たとえば、常陸では巻頭の表記から、国司が中心となって編集にあたったことが判る。ところが、出雲では、国造と意字郡大領を兼務する出雲臣廣嶋が中心となって編纂作業をしていた。し

かも、その意図は、「詞源を裁定する」<sup>29)</sup>ことにあった。採用された記事の中には、それまで中央政府に伝えられていたものと著しく異なるものも含まれていた。

門部王は、風土記編集では完全にカヤの外に置かれていた。そこに  
出雲における権力の二重構造を垣間見ることが出来る。出雲において  
地縁・血縁を持たない国司の叔寥と悲哀はいかばかりであったろうか。  
国守館の南側を意宇川が流れ、南岸には低い丘陵が広がる。その景  
観は平城京の佐保川と佐保丘陵に似ている。そこは親族や友人がいる  
懐かしい場所だった。門部王が実際に千鳥の鳴き声を聞いたかどうか  
は判らない。佐保川は、(巻4―五二六)や(巻7―一一二三)に見え  
るようにしばしば千鳥が詠まれることがあり、それを意識してかかる  
表現をとった可能性もある<sup>30)</sup>。

当時、出雲臣廣嶋ら風土記を編纂した郡司層は中海を「入海」と呼  
んでいた。門部王は、その呼称法に拠らず、意宇川が注ぐ海を「飢宇  
の海」と表現した。その読みが人麻呂の「淡海の海」と通じるのも理  
由だろう。この歌に接した人は、「淡海の海」と呼ばれた琵琶湖の景観  
を思い出し、見たことのない「飢宇の海」のイメージを琵琶湖の景観  
に重ねたに違いない。

ところで、天平勝宝八(七五六)年十一月、出雲国掾の安宿奈杼麻  
呂が、朝集使として上京した。その際、平城京内にある奈杼麻呂の邸  
宅に安宿王始め複数の人物が集まり宴が催された。席上、奈杼麻呂は、

大君の命かしこみ於保の浦を背向に見つつ都へ上る

(巻20―四四七二)

と詠んだ。松江市揖屋町付近の旧意宇川河口付近では、中海の汀線が  
砂堆に沿って大きく彎入して「浦」を形成していた。まさに「於保の  
浦」と呼ぶのに相応しい場所である。山陰道は、揖屋町平賀付近で南  
東に向きを変え、丘陵を越えて東に進む。そこから国府の方を振り返  
れば、北側には「意宇の海」が広がり、その向こうには美しい嵩山が  
見える。このような素晴らしい景観を見ることなく、都にのぼるとい  
うのである。この「於保の浦」というのは、門部王の「飢宇の海」と  
いう表記法に倣ったものだろう。

門部王の歌に戻ろう。彼は、人麻呂の歌を援用しながら中海に注ぐ  
意宇川の自然景観を叙述し、その後平城京への望郷の思いを詠んだ。  
人麻呂は、「石見相聞歌」において、石見の実際の景観を巧みに詠み  
込みながら、妻への愛情の大きさと別れの悲しさをうたった。その景  
観はあるがままのものではなく、自身の思い出が石見の妻のイメージ  
と重なり、形を変えて再生されたものであった。こうして完成した作  
品は虚構でありながら深遠なりアリズムを有していた。さらに、旧作  
の一部を引用したことで、思い出が作品の中に包みこまれ、見る者を  
響かせ、一層の感動を与えるようになった。「石見相聞歌」は序的部  
分(自然)と被序的部分(人間)が見事に連響している。しかし、門  
部王の歌は自身の思い出に基づいて形を変えて創作したものでなく、  
たんに人麻呂の歌を援用しただけだった。そのため、作品に深遠さが  
欠如し、感動も少ないように思われる。

## (2) 巻4―五三六について

続いて巻4―五三六について検討したい。

飲宇の海の潮干の渦の片思に思ひや行かむ道の長手を

《大意》（飲宇の海の潮が干て出来る干渦のカタということばのように）片思いに独りあなたのことを思いながら、長い長い道を行くことであろうか。

右は、門部王、出雲守に任さす時、部内の娘子を娶る。いまだ幾時ならずして、既に往来を絶つ。月を累ねて後、また愛しぶる心を起す。よりにこの歌を作りて娘子に贈り致す。

左註によれば、出雲に国守として赴任した門部王は、管内の女性と結ばれたものの、ほどなくして関係が途絶えた。数カ月後愛情が再燃し、再び会いに行こうとした時、この歌を贈ったのだという。

この左註については、二つの解釈がある。契沖は、部内の娘子を再び訪ねる時のものと解釈し、鹿持雅澄らは門部王が上京するときに歌ったものとした。現在は後者とする研究者が多い。

天平二（七三〇）年十二月、大伴旅人が任を終えて大宰府から都に戻るとき、遊行女婦の児島と歌の贈答を行った（巻六―九六五―九六七）。このほかにも、『万葉集』には、都に帰る官人と遊行女婦との間で交わされた恋の歌がいくつもある。門部王の歌もそのような作品の一つだというのである。ただ、なぜ上京時に遊行女婦との間で歌をやりとりする必要があったのか、そして、門部王の歌もそのような歌の一種であるかというのか、重要な問題であるにもかかわらず、具体的な根拠を挙げて検討したものは少なかった。

このことについて積極的に取り組んだのが飯田勇<sup>33</sup>だった。それによれば、この歌は、娘子に対する個人的な愛情をうたったものではなく、

門部王と遊行女婦との間でかわされたもので、歓送会の席上披露された儀礼歌なのだという。

飯田によれば、かつて天皇の「ミコトモチ」として赴任した国司が地方の女性と結ばれる政治的儀礼があったが、それが形骸化し、歓送会に臨席した遊行女婦との間で恋の歌をかわすようになったという。門部王の歌の左註については、儀礼的な意味が判らなくなった人物が、国司が地方の子女を娶る例によってこのような註をつけたのだとする。

しかし、筆者は、これだけの理由で遊行女婦への歌とすることに戸惑いを覚える。

大伴旅人と児島の間に関わされた歌が、都に帰る官人と遊行女婦との間のものであることは正しいだろう。『万葉集』所収の恋の歌に同様のものが多くあったことも理解出来る。しかし、国司と遊行女婦との間に交わされた歌の多くには官人が都に帰る時のものとする左註があるが、門部王の歌にはそのようなことは書かれていない。

左註について、国司と郡司層との間の儀礼の意味を理解できなくなったのでこういう表記になったと飯田は考察したが、そもそも出雲において、国司が対立関係にあった郡司層の子女と結ばれることはあったのだろうか。

たしかに、この歌から約二十年後の『類聚三代格』天平十六（七四四）年十月十四日条には、

勅、此季国司多娶所部女子為妻妾、自今以後、悉皆禁断。国雖隔越不得輒娶。若嫁与郡司者解却見任。百姓者准解見任罪論之。但家妻聽自将去。

と、多くの国司が管内の女子を娶って妻妾とすることを禁じた勅令が出されている。ここでは、国司に対して子女を提供した郡司が解任され、百姓も罪を問われることが述べられている。それは、とりもなおさず、国司が地方の女性と結ばれた事例が少なくなかったことを示すものである。しかしながら、この史料をもって出雲でも同様の状況だったと決めつけることは出来ない。

時期は下がるが、延暦十七(七九八)年十月十一日の「太政官符」に興味深い記事が載っている。それによれば、出雲では、長い間意宇郡大領を兼務する出雲国造が新任の日に神事に事寄せて多くの百姓の女子を采女と名付けて娶っていた。これを止めさせることが出来るのは国司だが、前述したように、出雲では国司は国造と対立関係にあった。やむなく、国司は太政官に解決を委ねた。

これに対する太政官の対応は、一応、国造の行為を諫めながらも、神事としてやむを得ない場合は、一人に限って采女として娶ることを認めるというものだった。そればかりではない。国司に対して、国造の采女を卜占で占って定め、名前が書かれた紙を他人が見ないように厳封するように指示を出した。出雲では、国造でもあった意宇郡大領に対して国司といえども遠慮しなければならない微妙な立場にあったことが判る。出雲でも国司赴任の際に、天皇の「ミコトモチ」として地方の女性と結ばれる儀礼があったと判断するためには、さらに確実な証拠を挙げて論証しなければならない。

また、「道の長手」の意味についても疑義がある。すなわち、この歌を門部王の上京時のものとする研究者は、『道の長手』を出雲から都に向う「長い長い道のり」の意味に理解するが、果たしてその解釈は正

しいものだろうか。

《道の長手》は、ほかに《道の永手》《道の長道》などと表記されることもあり、『万葉集』には、七例(4―536、4―781、5―84、5―888、12―313、15―372、20―434)が載る。

(a) 大伴宿禰家持、更、紀女郎に贈る歌五首

ぬばたまの昨夜は還しつ今夜さへわれを還すな路の長道を

(巻4―781)

(b) 大伴君熊凝の歌二首 大典麻田陽春の作

国遠き道の長路をおほほしく今日や過ぎなむ言問もなく

(巻5―884)

(c) 常知らぬ道の長手をくれくれと如何にか行かむ糧米は無しに

一に云はく、乾飯は無しに (巻5―884)

(d) な行きそと帰りも来やと顧みに行けど帰らず道の長手を

(巻12―313)

(e) 君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも

(巻15―372)

(f) 橘の美衰利の里に父を置きて道の長道は行きかてぬかも

(巻20―434)

右の一首は丈部足磨のなり。

(a)は、遊行女婦との間で交わした儀礼歌とされ、歌われている景観は虚構といわれている。ここでは、長い道のりの意味で用いられている。

(b)は、天平三年六月、相撲使の従人として上京中に故郷を遠く離れ

た安芸国の高庭駅で病のために亡くなった大伴君熊凝の心境を麻田陽春が詠んだのだが、その中に「長路」が使われる。ここでは、肥後と平城京を結ぶ長い旅の道中の意味で用いられている。この歌を承けて、山上憶良が若くして亡くなった大伴君熊凝を悼んで一つの長歌と四つの短歌を詠んだ。そして、(c)において、遠い死出の旅路を行く熊凝の不安を表すべく「道の長手」を用いた。

(f)の美袁利の現在地は不明だが、橘は静岡市清水区小島町立花とされ、付近を古代東海道が通り、息津駅（静岡市清水区興津）が置かれていた。

巻4―五三六のみ長の異体字である「永」を用い、他は「長」を使う。「長手」について、漢語で用例を求めてみたが、漢和辞書・漢籍などの索引のどこにも見当たらない。漢語としては存在しなかったと思われる。

従来、「長手」は遠い道を示すものと理解されてきた。たしかに、(b)（巻5―八八四）・(c)（巻5―八八八）・(d)（巻12―三三三）は、「道のりが長い」という意味で使われているように見える。

これに対して、門部王の詠んだ巻4―五三六と、(a)（巻4―七八一）、(e)（巻15―三七二四）、(f)（巻20―四三二二）の四首は、従来の解釈以外の理解が可能のように思われる。すなわち、これらにおける《道の長手》は、直線的に延びる古代道路の景観を反映させた表現ではないかと考えられるのである。

昭和五〇年代まで古代道路の実態は不明だった。それゆえ、多くの研究者が《道の長手》を長い道のりの意味に理解したのは当然のことだった。しかし、全国各地で幅六〜十四メートルの道路痕跡が数キロ

にわたって平野を貫いている事例が次々に報告され、古代駅路は直線的に敷設されていたことが判明しており、見直すべきではなかるうか。ここで、今一度、出雲国府周辺の古代山陰道の経路を思い出したい。

門部王がいた出雲国府付近では、道幅十四メートルの山陰道が、約十二キロにわたってほぼ一直線に意宇平野を横切っていた。そして、山陰道は出雲郷の竹花付近から揖屋町にかけては、門部王が「飫宇の海」と表現した中海の湖岸を通っていた。《長手》について、歴史地理学の木本雅康は、「(前略)「道の長手」とは、あるいはこの直線道路が、門部王の心の中に印象深く感じられていたことよって生まれた表現ではないだろうか」と推量したが、筆者も、《道の長手》というのは、平野を一直線に貫くように敷設された古代道路の形状を踏まえたものではないかと理解したい。

この歌を上京時のものであると十分な論証がなされていない現状では、筆者は、編纂者の意図に即して左註にしたがって解釈するべきと考える。

『出雲国風土記』によれば、意宇郡内には、伯耆国から石見国に向かう山陰道と国府十字街から隠岐国に向かう官道（きたしまがれるみち枉北道）と、それ以外の道があった。国守館を出て中海沿岸を通る道は山陰道だけである。門部王が心を寄せた女性は、意宇郡東部に住んでいたことになるだろう。

当時、中海は日本海と繋がっていて、外洋の影響を受けて潮の満ち引きが見られた。ただし、日本海沿岸では、瀬戸内や太平洋沿岸とは異なり、満ち引きはさほど大きくなく、大規模な干潟は形成されにく

い。上二句の自然景観は必ずしも正確なものではなく、片思いを導きだすための序詞に過ぎない。

この歌には、当時の山陰道の形状と中海の景観が想像を交えて巧みに詠み込まれている。研究者の中には、門部王の出雲守赴任に懐疑的な見方をする者もいるが、<sup>(36)</sup>実際に出雲国府に赴任して、意宇平野の景観を見たからこそ描けたものである。

ところで、佐藤武義は、『万葉集』中の「片思」と「片恋」の使用事例（「片思」一〇例、「片恋」九例）について詳細に検討し、「片思」と「片恋」が恋愛の深化の度合いによって明確に区別されていたと結論した。そして、「片思」は、相手との交感が認められながらもひとり居の寂しさに耐えかねての恋慕、「片恋」は、相手に気付かれない一方的な思慕と異なる使用があったとする。「片思」の方が思慕の念がより深いものであったというのである。<sup>(37)</sup>さらに、「眼前にいない人(物事)」に「恋ふ」行動が発動した後、脳裡に人(物事)を思い描く「思ふ」が現れる。その結果、相手への思慕が「恋ふ」から「思ふ」へと変化するものである<sup>(38)</sup>とする。

この考察に従うならば、作中人物は、一時期お互いに心惹かれあったものの、その後心が離れてしまった人を前よりも一層深く思うようになり、女性の住む里を目指している。その道はひたすらまっすぐで、はるか遠くに見える。女性に対するもどかしい恋心が感じられる。

ただし、上二句の自然景観はあくまでも「片思」を引き出すための「序詞」に過ぎない。優れた技巧は評価されるだろうが、読んだ時の感動は少ない。ここに画一化した後期万葉歌人の限界を見ることが出来るのではないだろうか。

## むすび

本稿は、『出雲国風土記』の記述と考古学や地理学などの総合調査によって判明した古代意宇郡の景観を把握した上で、出雲国守の門部王が詠んだ巻3―371・巻4―536の二首を分析し、出雲の古代景観が門部王の作品の中でどのように表現されたかを明らかにしたものである。その結果は以下ようになる。

- (1) 門部王は、養老五(七二二)年頃に出雲国に守として赴任し、巻3―371と巻4―536の二首を詠んだ。
- (2) 巻3―371では、自身の過去の作品の一部を引用するのでなく、人麻呂の歌を援用して悲哀を歌った。はじめに出雲国庁の置かれた意宇平野の自然景観を歌い、その後平城京への望郷の思いが詠まれている。背景には門部王と郡司らとの確執があったと思われる。
- (3) 巻4―536は、当時の山陰道の形状と中海の景観を踏まえ、一部に文学的虚構を交えながら、恋する女性のもとに向かおうとする姿を描いた作品だと理解出来る。ただし、上二句の自然景観はあくまでも「片思」を引き出すための「序詞」として使われたに過ぎなかった。そのため、優れた技巧性は認められるが、深遠さに欠けるものとなった。

以上である。門部王の歌は、柿本人麻呂ら前期万葉歌人の作品と比べると技巧が目立つが、独自性に乏しい。そのため、作品には悲哀は十分表われず、作者の感動も充分伝わってこない。これが画一的になっ

た後期万葉歌人の限界なのかもしれない。

今後、さらに山陰地方をはじめとして各地の万葉歌について景観論的立場から一つずつ検証していきたいと考える。

## 註

- (1) 神英雄『柿本人麻呂の石見』(自照社出版、二〇一〇年)。
- (2) 高木市之助他校注『万葉集』一(岩波書店、一九五七年)の表記による。以下同じ。〈大意〉も同書に拠る。
- (3) 意宇川の河口付近の東出雲町出雲郷の阿太加夜神社境内には、意宇川に面して昭和三九(一九六四)年建立の出雲大社宮司千家尊祀揮毫の歌碑が建っている。しかし、この位置は、厳密な検証を経て決められたものではなかった。同社には、後世に神社が対岸(図9)から現在地に移転したとの伝承がある。
- (4) 佐佐木忠慧『東国歌枕』(おうふう、二〇〇五年)、同『大和国歌枕』(おうふう、二〇〇八年)ほか多数。具体的な考察では、藤岡謙二郎『先史地域及び都市域の研究』(大明堂、一九五六年)、同『都市と交通路の歴史地理学的研究』(大明堂、一九六〇年)、同『地理学と歴史的景観』(大明堂、一九七七年)、谷岡武雄『平野の地理』(古今書院、一九六三年)などの方法を援用した。
- (5) 佐野正己「門部王攷―天平作家研究―」(『中大国文』二、一九五九年)八〇―一六頁。
- (6) 黛弘道「万葉歌人『門部王』小考」(五味智英先生古希記念『上代文学論叢』第八冊、笠間書院、一九七七年)。

- (7) 埴保己一『新校群書類従』第三卷(一九三〇年・一九七七年履刻。名著出版)四〇二頁。
- (8) 澤瀉久孝「万葉作者襟攷」(『万葉の作品と時代』(岩波書店、一九四一年)二一―二二〇頁)。
- (9) 佐野前掲註5に同じ。
- (10) 黛前掲註6。二七二頁。
- (11) 「家伝・下」(『寧楽遺文』下巻(東京堂出版、一九六二年)八八五頁)。
- (12) 松江市八雲町日吉は過去に頻繁に洪水被害が起きていたが、在地の豪農周藤弥兵衛良利らが私財を投じて『日吉切通』と呼ばれる新河道の開削と築堤などを行い、治水に成功した。
- (13) 神英雄「神奈備考」(関山和夫博士喜寿記念論集 仏教 文学 芸能、思文閣出版、二〇〇六年)二八九―三〇九頁、同「神奈備と三諸の歴史地理学的考察」(『日野昭先生傘寿記念論集 日本古代の宗教と伝承』、勉誠出版、二〇〇九年)五―二九頁。
- (14) 秋本吉郎校注『日本古典文学大系二・風土記』(岩波書店、一九五八年)一九頁。
- (15) 丹羽野裕「地形の復元」(『出雲国府周辺の復元研究』(二〇〇九年)一三三頁)。
- (16) 広江耕史「出雲国府と周辺の遺跡」(『風土記の考古学』三、同成社、一九九五年)一七七―一九二頁。
- (17) 前掲註15に同じ。
- (18) 成瀬敏郎「意宇平野―その形成について―」(『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』、一九七五年)八五―一〇〇頁。
- (19) 秋本前掲註14。一四一頁。

- (20) 高安克己・竹広文明『風土記』時代の出雲の自然環境(『風土記の考古学』三、同成社、一九九五年) 四〇頁。
- (21) 高安克己・竹広文明前掲注 20。四二頁。
- (22) 中村太一『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路―意字郡を中心として―(『出雲古代史研究』二六、一九九二年) 六九〜九五頁。
- (23) 中村前掲註 22。七六・七七頁。
- (24) 前掲註 15。二三頁。
- (25) 木本雅康『出雲国西部の古代駅路』(『出雲古代史研究』十一、二〇〇一年) 四二〜八〇頁。
- (26) 秋本前掲註 14。一〇九頁。
- (27) 丹羽野前掲註 15。三九頁。
- (28) 井上實『飢宇の海の河原の千鳥』(『武庫川国文』三八、一九九一年) 六四〜七六頁。
- (29) 秋本前掲註 14。九五頁。
- (30) 契沖『万葉代匠記』二(初稿本天和年間に成立・精撰本元禄三年成立)、『契冲全集』巻二、岩波書店、一九七三年) 三五―頁。
- (31) 鹿持雅澄『万葉集古義』四巻(国書刊行会、一八九八年) 四四―頁。
- (32) 土屋文明『万葉集私注』二(筑摩書房、一九四九年) 三一―八頁。武田祐吉『万葉集全註釈』五(角川書店、一九五七年) 一〇五頁。伊藤博『万葉集釈注』二(集英社、一九九六年) 四四六頁。梅木裕『万葉集』五三六番歌小考(『解釈』四九―十一、十二、二〇〇三年) ほか。
- (33) 飯田勇『遊行女婦』をめぐって―万葉集を読む―(『東京都立大学文学報』三三〇、二〇〇二年) 一〜一九頁。
- (34) 『新訂増補国史大系 類聚三代格』前篇(吉川弘文館、一九七七年) 三〇

二頁。

(35) 木本前掲註 25。四七頁。

(36) 新谷秀夫『門部王の「恋の歌」をよむ』(『高岡市万葉歴史館紀要』一五、二〇〇五年) 九―頁。

(37) 佐藤武義『万葉語としての『片思』と『片恋』』(『日本文芸思潮論』、桜楓社、一九九一年) 七三〜七六頁。

(38) 佐藤前掲註 37。七三〜七四頁。

## 付記

本稿執筆に際して、島根県古代文化センター『出雲国府周辺の復元研究』(島根県古代文化センター調査研究報告書四三、二〇〇九年)を参考にした。また、八雲立つ風土記の丘資料館にお世話になった。記して謝意を表したい。

(浜田市立石正美術館主任学芸員)